

しは高き義也と、萬葉集抄に見えたり、キといひしは即芒也、其芒の高きを云ふ也、高しとは猶長しといふが如くなり、倭名鈔に、大麥をばフトムギ、一にカチカタといふ、小麥をばコムギ、一にマムギといふと註せり、フトは即太也、カチは搗也、カタは硬也、これを搗つに硬きを云ふなり、コとは即小也、マとは眞也、古の俗には、小麥をもて眞麥となせしと見えたり、又麥奴はムギノクロミ、稍はムギカラ、麥莖也、麩はコムギノカス、小麥皮屑也と註したり、麥奴とは、大麥にもあれ、小麥にもあれ、穂の熟しなむとする時に、上に黒黴あるものをいふ、クロミとは黒實也、即今俗にクロボといふは是也、

〔倭訓栞後編十六〕むぎ 麥を訓せり、聚芒ムギの義也、略中 和名抄に大麥をふとむぎ、小麥をこむぎ、穰

麥をからすむぎ、蕎麥をくろむぎとよめり、今穰麥をも篩草をも弘法むぎといふ、かたつきむぎ西行の歌に見ゆ、

〔萬葉集十四〕相聞東歌

久敵胡之爾武藝波武古宇馬能波都波都爾安比見之兒良之安夜爾可奈思母、

或本歌曰、宇麻勢胡之牟伎波武古麻能波都波都爾仁必波太布禮思古呂之可奈思母、

〔覆醬續集二〕隴麥

麥秋足民望村落歌擊壤陸畝分黃雲野風漲青浪杜叟巧作行堯夫便助葬誰家收雞鳴雞鳴也更使醞酒釀

〔本朝武家根元中〕出陣并武者押の辨

門出の飯の上に、大麥を三粒をく、麥に勝方といふ名ある故也、

〔倭訓栞中編八〕こぞ略中 草は、麥をいふといへり、

紅葉ばのちるやちららぬに種まきて卯月さ月にかるはこぞくさ